

教育における価値と自由の問題 : Bertrand Russell を中心として

高田, 熱美

<https://doi.org/10.15017/58>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 1, pp.13-21, 1974-02-09. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン :
権利関係 :

教育における価値と自由の問題

— Bertrand Russell を中心として —

高 田 熱 美

Problems of Value and Freedom in Education

— Centered around Bertrand Russell —

Atsumi Takada

はじめに

Kant がくりかえし力を込めて語ったことは人間の自然的傾向に従うだけでは、決して倫理的価値を達成することはできない、ということであった。人は、自らの意志によって欲望に抵抗し、それを支配せねばならないというのである。恣意性としての欲望への隷従から脱し、その支配者となること、即ち、自己の内に見出した普遍の理法もしくは倫理的価値に服従することにおいて、私は自由であるということが出来る。これは、理性による欲望の支配なのである。

これに対して、近代に現われた自由の観念は独特であった。とくにこれはイギリスの思想に見ることができる。周知のように、Hobbs は個人の自由を極端なほどに強調した。彼は、権威や法を必要悪以上のものとは考えなかった。あらゆる権威や法は、個人の自由を抑制するものである。この主張は、Adam Smith においても、変容されたとはいえ、まだ楽天的に強調されている。さらに、J. S. Mill は、個人の自由を真理追求に不可欠な条件として論究した。続いて、Mill を思想的教父とする Bertrand Russell は、自由を、他者による強制の除去と見るのである。人は、欲するがままに生き行動しうるものが、相互に認められなければならない。¹⁾

かかる意味の自由においては、価値を目指すはずの教育は、いかなるものと解されるので

あろうか。教育は、価値の選択を基本とするものではあれ、やはり、強制や支配であるのか。それとも、社会を維持するための必要悪として在るのか。あるいは、子どもが為したいことを承認し、それを妨げるものを除去するためにあるのであろうか。現代においては、自由の概念は何ひとつ明らかにされてはいないように見える。かくして、われわれは、イギリスの思想、とくに Bertrand Russell を手がかりとして、教育における価値と自由の問題を論究したいと思うのである。

1. 欲望

欲望への障害がなく、欲するとおりのことを為しうる自由は、あるいは、欲したならば、それを為すのに何ら人為的な拘束がないという意味での自由は、方向いわば価値へ欲望を導こうとする作用と拮抗するものとして把えられる。

とここで、周知のように、Aristoteles は、ニコマコス倫理学の冒頭において、「いかなる技術もいかなる研究も、同じくまた、いかなる実践も、ことごとく、何らかの善きものを追求していると考えられる。『善』をもって『万物の追求するところ』となすすぐれた解明も生れてくる所以である。」²⁾と述べた。かかる論点を Mill は、さらに、人間の経験的方法によって論証しようとしているのであろうか。「ある対象が目に見える (visible) ということを実証するには、人びとがそれを実際に見るほかはな

い。ある音がきこえるということを証明するには、人びとがその音をきくほかはない。さらにわれわれの経験の、ほかの源泉についてもそういえる。同じように、あるものが望ましい (desirable) ことを示す証拠は、人びとが実際に望んでいる (desire) ということしかない、と私は解する。³⁾ という。Mill よりも大胆に Russell は述べている。「もし、われわれが欲望をもたぬとすれば、われわれは決して善と悪との対立を考えないであろうことは明らかである。」「善や悪についての観念が欲望とある結びつきを有していることは明白である。一見して、われわれすべてが望むものは『善』であり、われわれが恐れるものは『悪』である。⁴⁾」

ところが、Moore は、かかる論点に立つ人びと、とくに Mill に激しい批判をあげた。彼は、Mill が「人びとが実際に望んでいる」こと (事実命題) から、「あるものが望ましい。⁵⁾」という価値命題を導いている (自然主義的誤謬)、というのである。

Aなる人が望んでいる事柄は、その人にとっては、実際に望ましいともいえる。だが、それは、すべての人びとに、客観的に、望ましいということにはならない。従って、そこからは、すべての人びとがそれを「望べきである」という価値命題は生れない。Moore が事実の命題から価値命題を導くのは誤りであるとするのは、その限りでは、正しいのである。

しかし、Mill は、「望んでいる」を個人の主観的な事実ではなく、人びとが望みかつ望んできたという広い事実の中に見ているのである。「すべての人びとが望むべきである」という命題は、かかる、人びとが望んでいる事実を通して明らかにされることはいうまでもない。

「べきである」は、当為であると同時に、「そうせざるをえない」という必然をも意味する。従って、「われわれすべてが望むべきものは善である」という命題は、「われわれすべてが望むものは善である」という命題をも含みうるのである。もちろん、客観の側から見れば Russell や Mill が賛成すると否とに拘らず、

これは形而上学的命題なのである。また、主観の側に立てば、この命題は、人間性に対する深い信頼に支えられた、実現されるべき、可能的事実である。これは、教育を行なう者が依って立つ前提といえる。ここから、「教育の目的は、人間性が有している衝動の範囲を拡大することにつぎる。⁶⁾」という Russell の主張も意味を帯びてくるのである。

このように「われわれすべてが望むものは善である」という命題は、二重の意味をもつ。従って、これは単純な性善説ではない。また、これは、実際に「善」以外のものは望みえないということでもない。もしそうであれば、「善」を望むべきであるという価値命題は成立しえぬ。それどころか「善」という概念自体も必要でなくなる。その結果、すべての欲望は肯定され、放置されるであろう。

2. 価値

「われわれすべてが望むものは善である」という普遍もしくは必然としての人間の本質規定が実現されるように、欲望は導かれねばならない。

ところで善は、キリストが人間に愛を与え、愛を望んだという事実によって明らかにされる。Mill は、自己の功利主義倫理の基礎をキリストの事実においている。「ナザレのイエスの黄金律の中に、われわれは功利主義の完全な精神を読みとる。おのれの欲するところを人に施し、おのれのごとく隣人を愛せよというのは、功利主義倫理の理想的極致である。⁷⁾」Russell もまた、かかる事実に立ち、「キリスト教的な愛」の伝統に立っている。彼は、「愛は、それ自身の理想とそれに内在する道徳基準というものを有する⁸⁾」のであり、「愛それ自体が善である⁹⁾」と主張し続ける。従って、「われわれの欲望に普遍的な意義を与えようとすること¹⁰⁾」とは、欲望を愛に向けて導くことなのである。

ところで、イギリス功利主義の倫理は、欲望と快苦とを深く連関させて把えてきた。すでに Hume は、彼の「人性論」において、快苦の

問題を検討したし、Bentham は、快苦を倫理的行為の基礎においた。「自然は、人類を『苦痛』および『快楽』という二人の主権者の支配下においた。われわれが何を為すべきであるかを指示し、また、私たちが何を為すであろうかを規定するのは、この二人の主権者だけである。11)」

いかにも、すべての人間は快と苦の支配を受けている。人びとは快を持続させ、苦を回避しようとする。従って快苦は、われわれが人びとのために何を為すべきであるかを指示することができるのである。Bentham はいう、「快と苦とは、立法者が仕事をすをために有する手段である¹²⁾」「快と苦の回避とは、立法者が行為しなければならない目的である。¹³⁾」

ここから、Bentham は快と苦の計量比較を行なおうとする。これに対して Mill は、「ある種の快 (some kind of pleasure) は、ほかの快よりもいっそう望ましく、いっそう価値があるという事実を認めることは、功利の原理にいささかも衝突しないのである。ほかのものを評価するときには、量のみならず質も考慮されるのに、快の評価だけは量でなされるべきである、というのは不合理ではないか。¹⁴⁾」という。Russell もまた「われわれは、快をその強さに比例して価値あるとはしない。ある快は、本来的に他の快より好ましいように思われる。¹⁵⁾」という。両者とも、豚の快の外に Socrates の快、生理における快の外に精神における快を想定しているのである。

Bentham と Mill, Russell との違いは、前者が社会における立法者として、後者が個人における道徳家として快苦を見たことによる。Bentham は、個人の総体としての社会の幸福、即ち快の社会的極大化（最大多数の最大幸福）を目的とした。そのためには、個人の快苦が、等質で、その大小が比較計量できる客観的事実であることが必要であった。Bentham の努力が、刺激に対する反応（感覚）が一定で、計量可能な快苦の解明に向けられたのは当然である。これに比して、Mill や Russell の試みは、具体的な状況における人間の感情としての

快苦を検討することであった。

しかし、これらの違いにも拘らず、彼らの意図は、いずれも、快苦を手がかりにして愛を具体化することにあつたのである。

従って、快苦はあくまで愛の実践の手がかりであつて、それ自体が究極の目的ではないということである。快楽主義の倫理は利己主義の倫理ではないのである。ここには、自己の快を追求する事実は含まれえない。自己の快は求められえないと考えられるからである。

快は、生理的、心理的、精神的な諸層において検討されるものであろう。かかる複雑な快の追求はともかくとして、私がどのようなことを望んでも、私は、私の望みを達成することからある快を得ることは、先ず明らかである。しかし、それ故に私が望んでいるものはすべてある種の快である、と断定されるならば、これは飛躍である。¹⁶⁾しかも、かかる快を価値目標とするかぎり、すべての欲望は肯定され、われわれは何を欲んでもよいという非現実的結果に至る。

Bentham が語ったように、すべての人間は快と苦の支配をうけている。これは、生理・感覚のレベルでは明白である。快苦は、生物としての人間に不可避な所与である。この世界では、快苦と欲望とが渾然一体となっている。ここでは、三者の先後関係、原因結果は問題とされえない。要するに、これらは、生理的因果の系、必然的な生起におけるひとつの過程にすぎないのである。その意味では、「空腹であるとき、私は食物を欲する。空腹が続くかぎり、食物は私に快を与えるであろう。しかし、空腹はひとつの欲望であり、それがまず現われるのだ。従って快は欲望の結果なのである。¹⁷⁾」という Russell の発言は一方的といえる。けだし、空腹は、生理的な意味では「欲望」であると同時に、苦であるともいえるからである。生理的系列の中では、快苦、欲望を明確に分かつことは不可能である。

しかし、ともかく、欲望は、生理的系列を越えた人間の全体である。従って、「・・・快への直接的欲望によって決定されているような行動

は、例外的で、しかも重要ではない。あらゆる人間の主たる活動は、快と苦の計算に先立つ欲望によって決定されている。¹⁸⁾」と Russell が結論するのは正しいのである。「人間は、ある非常に重要な点で、他の動物とは異っている。それは、人間が、無限の、決して十分には満たされることのできないような欲望を有していることである。¹⁹⁾」人間の欲望は、生理的系列を含みつつ、なおそれを越えた無限の動因 (the infinite motive²⁰⁾) である。人間の欲望は、何ものかに向かい、何ものかに働きかけ、結局、未来において、自らが何者かになろうとする構えなのである。この欲望は、無限の動因であるがゆえに、ある事柄を成就しても、満足しつくすことはない。欲望の成就と同時に生起する快も、一時的にすぎず、たちまち空虚が訪れる。人びとは、これを「欲望のパラドックス²¹⁾」という。

かかるパラドックスを脱出するためには、欲望自体の否定、即ち、自殺が、論理的には可能であろう。心理的快樂主義の落着く先は、かような自殺にほかならないであろう。パラドックスを脱するさらなる途は、欲望自体の質的深化拡大である。Russell は、「生の流れとの深い本性的融合²²⁾」という。たえず何ものかに向っている欲望は、結局、自己自身に向っているのである。「生の流れとの深い本性的融合」とは、欲望の自己徹底による普遍への再生であろう。「すべての人間は善を欲望する」という命題の根源的意味がここにあるのである。

ところが、Russell は、無限の動因としての欲望を追求する意図もその方法をも、もちあわせていなかったのか、これ以上、欲望の意味を解明してはいない。それゆえ、欲望と善である愛との連関が十分には証明されていない。だが、ともかく、Russell は、かかる欲望を基底にして、感覺的快樂主義を拒否し、欲望の根源的方向は愛であると主張する。具体的には、Russell は、自他の欲望を両立させうるものとしての「共存可能な (Compossible)²³⁾」欲望の育成を試みるのである。

かくして、功利主義の倫理は、自己自身に不

可避に迫ってくる快苦の支配を受けつつ、それを越えて愛を実現することを求める。従って、Bentham も Mill も Russell も「克己」を否定しない。それどころか、Russell は、現代の教育は「克己 (Stoicism) が人生において占める役割を最近軽く見ているようだ。とくに進歩的な教育者たちにその傾向がある。²⁴⁾」とさえいう。克己とは、いうまでもなく、愛を実現するため、即ち、他者の快を増し苦を減らすために、自己の感覺的快苦を意志的努力によって越えることなのである。

この点に立つかぎり、Moore と同様に、Russell が、「望んでいる」と「望むべきである」とを区別した理由を知るであろう。すべての人間は善を望んでいる、という人間の本性規定は、認識のレベルで問題にされるものではない。認識のレベルにおいては、「望んでいる」という事実 (自然的命題) と「望むべきである」という当為 (規範的命題) とが問題とされうる。意識の内においては、両者は、主観の認識乃至反省によって分離される。「望むべきである」は主観の自己に対する働きかけである。思うに、主観が他の主観の作用によって成立する間主観的存在であれば「望むべきである」は、主観と主観との同時包括的意味連関をも表明する。主観相互の関係から見れば、主観が「望んでいる」ことは、純粹に知的に処理できる事実可能性を表明しており、「望むべきである」というとき、それは、他の欲望の事実に対する働きかけを表明する。従って、「望んでいる」と「望むべきである」は、対象の相違ではなく、対象に対する働きかけの相違から生れる。それゆえ、主観が本来『望んでいる』ことの中に、両命題は環元されうるものなのである。かくして、実生活において、『望んでいる』ことから、「望むべきである」と「望んでいる」との命題が現出するのは、危機の瞬間であり、それを克服する方法としてこれは意味を有するのである。

だがともかく、この問題は、認識論的検討より社会の人間関係の中で考察されようとする。「べきである」として他に働きかける主観は、

高い価値に立っていると思っている者、実際には、為政者、道徳のエリート、教育者などである。Bentham は、立法のエリートとして大衆の欲望を考察し、快と苦の事実を鮮明にしようとした。教育者は、対象を子どもの欲望におく。そして、この欲望を「べきである」とされる方向へ導く。具体的には、まず、教育者が提示する規範を修得させられる。Russell は、この価値規範を「外的拘制 (the external pressure)」あるいは「紀律」という。従って、「教育の目的とは、外的拘制が子どもの中で、習慣、観念、共感というかたちをとるようにすることなのである。²⁵⁾」とされる。

3. 自由

われわれは、これまで、欲望の進むべき価値理念(方向)を検討してきた。Mill や Russell は、かかる価値の中へ欲望が融解されるよう試みてきたのである。ところが、他方では、善きことを行なわせることと自由にすることとは別の原理である、とされる。²⁶⁾そのため、善きことを行なわせるという理由で、強制し、他者の自由を束縛することが完全には許されないのである。

自由とは、消極的にいえば、外的な強制や束縛のないことだといわれる。積極的にいえば、自由とは、人間社会において、現に望んでいることができるということではない。現に望んではいないが、望みさえすれば、それができるといふことである。しかし、かかる意味での自由を極大化すれば、教育でさえもひとつの強制となり、教育は、社会乃至国家の秩序を維持するための必要悪としてのみ機能しうることにならないであろうか。われわれは、いよいよ、欲望の普遍化に対立するかに見える自由の問題に歩を進めたいと思う。

すべて、自由は、あるものの他のものに対する自由として考察される。では、自由は、自然現象界に対する自由としてあるのか。否、Kant は、自由を現象界に求めてはならないとしたが、イギリス経験論における自由も、因果の事実としての現象界に求められてはいない。Ru-

ssell は、意志の決定と自由の理論に関して次のようにのべている。「・・・事実、両者とも完全な形而上学的理論であり、科学的に確立しうる範囲を越えている。因果律の探究は、・・・科学の本質であり、従って、純粹に科学的な意味において、科学者は、つねに、決定論を操作上の仮説と見なさなければならない。²⁷⁾」Russell は、意志の決定と自由の理論が、科学の対象となる自然現象界においては、いずれも、明確な論証をもちえないというのである。Russell の自然世界の構造認識に検討の余地があるが、ともかく、Russell は、自然現象界に自由を求めることが無益であると考える。

では、自由とは、自己の情念、欲望、衝動とかいったものに対するものであるのか。自由は情念や欲望、衝動を思いのままに支配できるということであろうか。Platon の、感覚的なものを仮象とするという巨大な影響の下に、自由は、かかる意味にも解されてきた。ここでは、情念や欲望、衝動などから解放され、むしろ、それらを克服して善へ向かうことが自由なのである。しかし、すでに見たように、イギリスの思想は、善へ向かうことと自由になる或は自由にするのとを区別してきた。それは、両者が同一の原理に立っているという理論を否定する。両者は混同されてはならない。この混同から、善のため即ち自由のため、強制が認められねばならないという主張が何の疑点もなく正当化される。この混同において、強制の主体が国家や権力者の意志であるとき、民衆ははかりしれない不幸をもたらされる。ここでは、もはや、自由そのものが、強制を受け入れ、服従することと同一視される。

イギリスの思想における自由は、自然や情念に対する自由ではなく、他の人間もしくは人間社会に対する自由を基礎としている。それは、すでに与えられてある人間の存在における自由、即ち自由であることよりも、自由にする或は自由になるという対人間的なものとしてある。Locke や Mill が主張した自由は、かかる自由であったのである。Mill はいう。「この論文の主題は、哲学的必然論という誤った名

で呼ばれているものと不幸にも対立させられている、いわゆる意志の自由ではなくて、市民ないし社会的自由、即ち社会によって個人に当然行使されうる権力の性質と限界である。²⁸⁾

具体的にはこうである。自由は他者との対抗関係として現存する。従って、自由は、私の欲望とそれに対抗する他者の強制とに応じて変化する。もちろん、強制がなければ、自由そのものは存立しえなくなる。しかし、現実には、多様な欲望と強制とがあり、それゆえ、自由が問題となり、その内容は多義となる。それは、関係的、相対的である。たとえば、イギリスにおける自由は、まず、封建国家権力の強制に対する個人の経済活動の自由として現われ、現代における自由は、言論、表現、信教の自由といった精神的な活動における自由を標榜するのである。²⁹⁾要するに、自由は、具体的状況における他者の強制の事実との関りにおいて現われるのである。

それでは、普遍的価値へ欲望を導くための、いわゆる説明できる正当な理由をもった働きかけも、依然として、自由と対立する強制であるのか。教育は、すべて、欲望を善へ導く働きかけである。イギリスの自由は、教育のレベルで如何なる意味をもつのであるか。教育と自由は相対する両極性であるのか。いよいよ、われわれは教育の問題へ足を踏み入れる。これを、再び Russell を手がかりとしながら検討することにしよう。

4. 教育における自由

Russell は、「教育の目的は、成長の機会を提供し、有害な影響を除去することであると考えている」理論、「・・・いわば、教育の消極論に多くの真理がある。³⁰⁾」という。ただし、Rousseau に端を発したこの理論は、「教育における最大限に可能な自由」³¹⁾を主張したからである。

ところで、教育における自由とは、欲望の普遍化を試みる者、即ち教育者と子どもとの関係の中で考察されるにちがいない。だが、Russell

は、この関係における自由が何であるかを直接には明らかにしていない。ただ、彼は、教育における自由の欠如が如何なる結果に至るかを述べる。この検討から自由の意味を明らかにしたい。

第一に、自由の欠如（もちろんこれは絶対的欠如ではない）、即ち「強制は、独創性と知的興味を破壊するのである。³²⁾」といわれる。子どもの自発性 (spontaneity) が尊重され、独創性へ導かれることが重要なのである。知識の増大と芸術の発展は、まず自発性を基礎とする。知識の観点からいえば、自由の欠如は、真理の発見を妨げるということである。真理の発見は、自由な状態、雰囲気においてこそ可能だと考えられるからである。Russell によれば、人間は「いまとここ (the now and here) によって歪められずに、世界を公平に見渡すことのできる・・・存在者³³⁾」ではない。従って、真理についてよく思惟している者とそうでない者との作用関係である教育においても、このことは考慮されねばならない。

真理は永遠に探究されるべきもの、既に知られているものは懐疑されるべきものである。Hume 以来の懐疑の精神に立ち、³⁴⁾ 人間の真理理解の相対性に徹しようと Mill や Russell は試みるのである。それゆえ、真理を知っているという者は、すでにドグマに陥っているのである。われわれは真理について考えるほかはない。従って、教育とは、真理についてよく考えている者とそうでない者との関係、即ち、人間の真理理解の相対的關係に於て成立する。そして自由は、かかる関係の中で生きるのである。

つまり、ここでは、自由は、子どもの自発性や思考性およびそれらを豊かにする状態と同一視される。従って、自由は、美の創造や真理追求のために要求せられるものである。いわば、自由は、それらのための方法としてあるのである。それゆえ、Russell が、ここで見ている自由は、干渉や強制なきこととしての自由とは異質のものである。本来それ自体価値があるとされてきた自由は、教育においては、何かのためにあるものとなる。

自由そのものは、教育の中では問題とされえないのであろうか。ここに、自由の概念をさらに混乱させるものがある。それは、自由のパラドックス³⁵⁾といわれるものである。いかなる強制をも認めない自由は、社会的には、強者が弱者を支配する自由を生み出すがゆえに、弱者が極めて大きな強制（即ち不自由）を蒙るというのである。教育のレベルにおいても、かかる自由のパラドックスは存在する。Russell はそれを具体的にのべている。「もし、その人が、親切で寛大であっても、学校集団が残忍狭量のままに放置されるならば、彼の指導下にある子どもは、彼の長所にも拘らず、苦痛にみちた環境を与えられるであろう。ある種の近代学校における無干渉説は、かかる欠陥が起こりやすいところにまで来ていると思う。もし、子どもたちが絶対に大人たちの干渉をうけないなら、大きい子が小さい子の上に立って乱暴をふるいがちになる。そこで、学校の標語であるかのように思われている自由は、肉体的強者の特権のためにのみ存在することになる。36)」従って、個人の自由は、すべての者の自由のために制限されねばならない。個人の権利として求められてきた自由が、すべての者のためということ、即ち、公正や平等の原理を必要とし、その原理によって補完されねばならなくなるのである。

勿論、強制のパラドックスというものも考えられるであろう。Russell は、子どもにおける「自由の欠如は、大人たちとの衝突をひきおこす³⁷⁾」という。「何らかの方法で強制される子どもは、それに憎悪をもって反応する³⁸⁾」からである。また、Russell は、「大人たちへの尊敬など強制されるべきではない。大人たちは、子どもたちが彼らを馬鹿と呼びたい時には、いつでもそうすることを許すべきである。子どもたちが思っていることを口に出していうなと禁止したところで、そう思うことをやめさせることはできないからである。39)」という。これも強制のパラドックスの一例ということができよう。

Russell は、自由教育 (a free education) が「意志を強固にするため、知性と感情とを固

濁させてしまったという現実⁴⁰⁾」に反抗し、「幼児の取扱いに関して相当のものを為しとげた⁴¹⁾」ことを高く評価した。にも拘らず、Russell は、「経済における自由放任が、秩序ある計画という新しい型式に道を譲らなければならなかったのと全く同じように、教育における自由放任主義も、今は必要な段階ではあるとしても、最上のものではないと思うのである。42)」かくて、「学校において、自由が絶対的原理にまで打立てられうるとは考えない。それは、種々の限界を有している。43)」という。さらに述べている。「年月と経験とは、当然、想像されるほど私の意見を変えなかったが、自由は、重大な限界のある原理で、その意味での典型が教育の場合であることを悟るようになった。44)」

「自由を擁護する人が、特有の困難に出会うような領域がある。それは教育の領域である。45)」

これは、自由そのものが、一般社会においても教育においても限界があり、その限界は程度の相違にすぎないというのか、それとも社会一般と教育の世界とでは、自由は質的に違うということであろうか。

Russell は、Mill の見解を踏まえながら、その問題を検討している。Mill について彼はいう、Mill の「『自由論』は古典として残っている。その理論的欠陥を指摘することは容易だが、その価値は、世界が彼の教えから遠のけば遠のくほど増大する。46)」教育における自由を考えるならば、「……理想としては、生徒が行なわなければならないようなことに関する問題については、できるだけ合理的判断を行なえるように教育すべきだと思われる。このことは一方では思考の批判的習慣を訓練することを必要とし、他方では知識をできるだけかたよらないで与えることを必要とする。このようにして、生徒は大人になった時の真に自由な選択への準備をできるだろう。われわれは、子どもに自由を与えることはできないが、自由への準備を与えることはできるのであり、このことが教育の為すべきことである。47)」

自由とは、拘束のないこと、厳密に言えば、拘束をできるかぎり少なくすることである。そ

れで、Perers が述べるように、「人は、彼がしたいと欲する事柄を実行するのを誰も妨げようとしないうかぎり、自由である。⁴⁸⁾」といえる。つまり、欲しささえすればできるということが自由である。しかし、欲するということはたえず変容する。従って、自由の概念は、人びとが現に欲していることと同時に、欲する可能性のあることをも含めて追求されるべきである。

Russell において、教育における自由のための準備とは、客観的認識と批判的思考を豊かにし、そのことによって、欲望の可能性を開くことにあるのである。つまり、子どもが、将来、選択の可能な領域を広くもちうるように、教育は援助するというのである。従って、子どもが現実に求め選択することを許すものとしての自由は、「真に自由な選択の準備」の中で配慮され、それゆえ制限される。この意味で、教育においては、「子どもに自由を与えることはできない。」といわれるのである。

「真に自由な選択の準備」つまり、自由の基礎である選択の可能性の拡大のために、現在の子どもの自由は制限される。すると、将来のために自由は制限されねばならないという逆説が、成立するのであろうか。即ち、自由は真実なる価値のひとつであるが、その価値のために、現在の自由は拘束されるのであろうか。形式論的にはそうであろう。しかし、Russell は強制なきこととしての、或は、欲するとおりに為しうることとしての自由に、内容を与えようとしているのである。選択の可能性を拓くということは、事実及び歴史的現実の客観的認識と価値理解が不可欠である。Russell は、形式論的で内容空虚な自由に、真実乃至真理という内容を与えようとしているのである。教育においては、この内容を与えることが重要になる。従って、内容を与えられ、現実に生きた行為となる自由を、われわれは自律性と呼ぶべきであろう。自由を形式においてではなく、内容において見るとき、普遍を目指す教育と自由とは、相対する両極性ではなくなるのである。

社会一般においても、内容を欠いた自由を標榜するのは意味がない。「…自由のみが、行動

を決定しうる、決定すべき唯一の価値ではない。また自由をそれ自体目的というのは、あまりにも一般的になりすぎる。⁴⁹⁾」と Berlin はいう。歴史的には、自由は多くの価値のなかのひとつとして考えられ、行動の力となってきたが、自由にも多くの種類があり、相互に対立挫折し合っていることを考えるならば、むしろ、自由は、その内容である価値によって意味づけられる。従って、それぞれの自由の対立挫折はその内容であるそれぞれの価値の対立挫折であろう。Russell においても、形式としての自由自体は、とくに強者による強制の除去（現実的には、国家の権力に対する個人の価値の強調となる）という消極的な概念であって、これが生きるためには価値を自己のものとしなければならないのである。自由は、歴史的には個人主義から生れ、現実的力を有し、今もなお有しているが、それ自体は力ではない。Russell は、かくて、明解さを欠きはするが、次のように述べている。「私は、自由が、すべての価値の中で最大のものだと言っているのではない。最も価値の高いものは、われわれの内から発するもの——たとえば、創造的な芸術、愛、思想などのような——なのである。⁵⁰⁾」

Martin Buber は、教育における自由の問題を、さらに適確に指摘している。「すべての伝統的拘束が凋落し、その合法性が疑問にさらされてしまっているような時代においては、自由への傾向が台頭してきて、跳躍台が目標として取り扱われ、機能的善が実質的善として扱われるようになることは大いに理解されるところである。⁵¹⁾」そして、Buber も、Russell と同様、否それ以上に、「もっぱら、空疎な自由に内容を与え、振動あるいは旋回する自由に向を与えることのできる力⁵²⁾」を教育に期待するのである。

それでは、自由の内容と方向は何であるのか。それは、いうまでもなく、普遍的な善としての愛であり、これは、終局において、人間の尊厳性に基礎づけられる。「個人にこそ究極的な価値が求められる⁵³⁾」と Russell が主張する根底には、かかる人間の尊厳性の認識があった

というべきである。

しかしながら、自由にはさらなる問題がある。それは、人間存在にすでにあるものとしての、いわゆる既存としての自由の問題である。周知のごとく、Sartre は「人間は自由の刑に処せられている⁵¹⁾」と表現した。この自由は、われわれの自由にならない自由であり、その意味で絶対的必然である。これは、われわれに後悔の苦悩と責任を与える自由である。かかる範疇の自由は、実存哲学乃至人間学的考察を要するであろう。今後の課題としたい。

(受付：昭和48年10月31日)

文 献

- 1) cf. John Lewis: Bertrand Russell, Lawrence and Wishart, 1968. 中尾隆司訳「バートランド・ラッセル」ミネルヴァ書房, p. 132.
- 2) アリストテレス「ニコマコス倫理学」高田三郎訳, 河出書房, p. 17.
- 3) John Stuart Mill: Utilitarianism, Liberty and Representative Government, No.482, Everyman's Library. p.32.
- 4) Bertrand Russell: Religion and Science, p. 231, 1935, Oxford University Press, Maruzen Company Limited.
- 5) G.E. Moore: Principia Ethica, 1903 Cambridge, p.66.
Russell は一時, Moore の見解に加担したことがある。「The Elements of Ethics」 in: Philosophical Essays, p. 13—59参照。
- 6) Russell: Mysticism and Logic and other Essays, George Allen and Unwin, 1917, p. 38.
- 7) Mill: Utilitarianism, Liberty and Representative Government, Everyman's Library, p. 16.
- 8) Russell: Marriage and Morals, 1929, p. 66.
- 9) Ibid, p.67.
- 10) Russell: Religion and Science, p.233.
- 11) Jeremy Bentham: A Fragment on Government and An Introduction to the Principles of Moral and Legislation, Basil and Blackwell, 1967, p. 125
- 12) Ibid, p. 151.
- 13) Ibid, p. 151.
- 14) Mill: Utilitarianism, Liberty and Representative Government, Everyman's Library p. 7.
- 15) Russell: Human Society in Ethics and Politics, p. 117
- 16) Cf. Russell: History of Western Philosophy, p.745.
- 17) Ibid, p. 745.
- 18) Ibid, p. 745.
- 19) Russell: Human Society in Ethics and Politics, George Allen and Unwin. p. 161.
- 20) Ibid, p. 161.
- 21) 金子武蔵:「倫理学概論」岩波書店, p. 190.
- 22) Russell: The Conquest of Happiness, London, Unwin Books, p. 159.
- 23) Russell: Human Society in Ethics and Politics, p.19, 59.
- 24) Russell: In Praise of Idleness and other Essays, Unwin Books, 1935, p. 136
- 25) Russell: on Education, Allen und Unwin. 1926, p. 117.
- 26) たとえば, Isaiah Berlin: Four Essays on Liberty, Oxford University Press, London, 1969, 小川晃一他訳「自由論」みすず書房, 二つの自由概念を参照。
- 27) Russell: Religion and Science, p. 167—8
- 28) Mill: on Liberty, chap. 1, Introductory. p. 65.
- 29) Russell: Portraits from Memory and other Essays, George Allen & Unwin, 1956. p. 152.
- 30) Russell: Education and the Social Order, 1932, London, George Allen & Unwin, p. 29.
- 31) Ibid, p. 32.
- 32) Ibid, p. 32.
- 33) Russell: My Philosophical Development. 1959, p. 213.
- 34) たとえば, Popper, K: The Open Society and Its Enemies, 1945, Vol. 1, pp, 225—6がそうである。
- 35) 市井三郎「歴史の進歩とは何か」岩波新書, p. 160.
- 36) Russell: Education and the Social Order. p. 96.
- 37) Ibid, p. 32.
- 38) Ibid, p. 32.
- 39) Ibid, p. 62.
- 40) Ibid, p. 37.
- 41) Ibid, p. 31.
- 42) Ibid, pp. 31—2.
- 43) Ibid, p. 34.
- 44) Russell: Portraits from Memory and other Essays, George Allen and Unwin, 1956. p. 14.
- 45) Ibid, p. 151.
- 46) Ibid, p. 155.
- 47) Ibid, p. 152.
- 48) R. S. Peters: Ethics and Education, 1966, George Allen and Unwin, 三好信浩他訳「現代教育の倫理」黎明書店, p. 276.
- 49) Berlin: Four Essays on Liberty, Oxford University Press, London, 小川晃一他訳「自由論」みすず書房, p. 85.
- 50) Russell: Roads to Freedom, London, Allen & Unwin, 1918, p. 121.
- 51) Martin Buber: Reden über Erziehung, 1969, Verlag Lambert Schneider, Heidelberg, S. 24.
- 52) Ibid, S. 24.
- 53) Russell: Authority and the Individual, Unwin Books, p. 87.
- 54) Jean-Paul Sartre: 「L'existentialisme est Un Humanisme」伊吹正彦訳「実存主義とは何か」人文書院, p. 32.